

「記憶地図」を用いた無形の文化遺産の再生

—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—

Reproducing an Intangible Cultural Heritage in the Post Disaster Recovery Phase
by ‘Memory Mapping’: A Case of Religious Festival in Shizugawa area in Minami-Sanriku-Cho,
Miyagi Prefecture

板谷直子 (牛谷直子)¹・谷端 郷²・中谷友樹³

Naoko Itaya, Go Tanibata and Tomoki Nakaya

¹立命館大学客員准教授 衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)
Associate Professor, Kinugasa Research Organization, Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan
University

²立命館大学専門研究員 衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 (〒603-8341 京都市北区小松原北町58)
Post Doctoral Fellow, Kinugasa Research Organization, Institute of Disaster Mitigation for Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan
University

³立命館大学教授 文学部地域研究学域 (〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1)
Professor, Department of Geography, College of Letters, Ritsumeikan University

In 2014, we conducted a survey of ‘Memory Mapping’ about lost festivals to visually store local people's memories and senses of places about activities of local festivals on maps in Shizugawa area in Minami-Sanriku-Cho that severely suffered from Tsunami in 2011. This paper aims to follow-up the previous study by examining how ‘Memory Mapping’ have encouraged the young parishioners to reproduce the Areshima shrine’s religious festival after the disaster. Through interviewing parishioners, we identify that ‘Memory Mapping’ has effectively supported sharing of past experiences and meanings of the festival between young and old generations of parishioners activities for the festive recovery.

Keywords: Great East Japan Disaster, Post Disaster Recovery, Intangible Cultural Heritage, Memory Mapping by GIS

1. 研究の目的と背景

東日本大震災から6年を経て、被災地では復旧復興事業が進捗している。本研究の調査対象である宮城県南三陸町でも、津波の浸水被害を受けた市街地等の低地の盛土が進み、2015（平成27）年度には医療福祉施設、小中学校等教育施設が復旧した。2016（平成28）年度には、南三陸地方卸売市場や防災集団移転促進団地の建設が完了し、2017（平成29）年3月には、災害公営住宅整備事業の完了、南三陸さんさん商店街の移転再開、三陸縦貫自動車道・南三陸海岸インターチェンジの供用開始など、整備が進んでいる。一方で、南三陸町の人口は、東日本大震災による甚大な被害、長期間にわたる仮設住宅での生活を経て、2015（平成27）年10月の国勢調査で12,370人となり、2010（平成22）年の国勢調査での人口17,429人に比して、人口減少率29.0%と大きく減じており、今後、地域コミュニティを維持し、持続的に発展するための対策が必要となっている¹⁾。

筆者らは、宮城県南三陸町志津川地区を対象に、地域に密着した文化遺産と地域の人々のつながりから、復興を支える基盤となるコミュニティ存続の知見を得ることを目的に、地域の文化遺産が被災後の復興に果

たす役割に関する研究を継続的に実施している²⁾。震災から3年を経た2013（平成25）年度は、GIS（地理情報システム）を用いて、東日本大震災の津波による浸水域と社寺等の位置情報を重ね合わせ、被災した社寺等を抽出し、これらを対象に現地調査を行った³⁾。また、2014（平成26）年度は、東日本大震災の前後における、無形の文化遺産と地域とのつながりを把握することを目的に、祭礼に関する聞き取り調査を実施した。調査対象は、志津川地区の祭礼や地域信仰の中心的な役割を担ってきた五つの神社（上山八幡宮、保呂羽神社、荒嶋神社、西宮神社、古峯神社、以下五社、図1）、聞き取り調査の対象は、祭礼をつかさどる宮司、禰宜、別当、お世話人、氏子総代等である。得られた情報は、GISを用いて地図上に示し、祭礼に係る記憶地図を作成した⁴⁾。

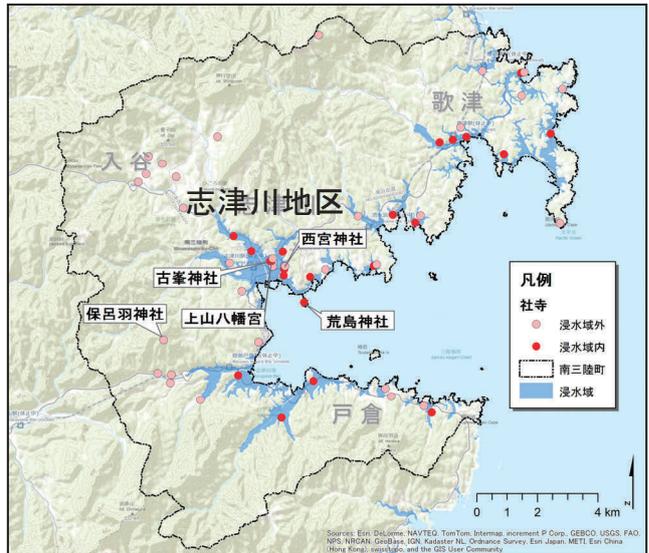


図1 南三陸町の社寺の被災状況

調査の結果、祭礼は、かつての震災からの復興の知恵を内包しつつ、コミュニティの子供の成長を共に喜ぶなど普遍的な価値を共有する側面を持ち、地域社会の変化とともに変容する柔軟性が祭礼を継承させてきたこと、とはいえ、運営組織の高齢化など震災前から継続の課題があったことを明らかにした。さらに、祭礼など無形文化財の継承に大事とされている「組織」、「モノ」、「場所」ごとに⁵⁾、南三陸町の五社の震災後の祭礼の状況を整理すると表1ようになる。その結果、全体の傾向としては、「組織」が解散すると、祭礼の催行を継続することは難しく、「モノ」が残ると、祭礼の継続が容易になるが、「場所」を失うと、従来通りの催行は難しいということが明らかとなった。

南三陸町では、2016年度、震災により休止していた祭礼の1つが復興した。そこで、本研究では、過年度の調査結果をふまえつつ、復興した祭礼の事例から、記憶地図の果たす役割について知見を得ることを目的とする。

近年、広島原爆のヒロシマ・アーカイブ⁶⁾や、戦争体験・戦後の生活⁷⁾、過去の祭礼景観の復原⁸⁾など、地図とくにGISを用いた記憶のアーカイブ化の取り組みが相次いで報告されている。これらは、失われた景観や過去の戦争体験、被災体験をGISを用いて地図上に示して、可視化、情報共有、記憶の継承を図ることが目指されている。本研究の記憶地図も、このようなGISを用いた記憶のアーカイブ化の一例として位置付けられる。

また、東日本大震災後の復興支援の中でも地図や地図に類するものを用いた記憶のアーカイブ化に関する実践・研究が見られる。たとえば、ハーバード大学のJapan Disasters Digital Archive⁹⁾、解散する集落を対象とした東北学院大学のトポフィリアプロジェクト¹⁰⁾、復元模型を用いた「街の記憶ワークショップ」¹¹⁻¹³⁾などである。とくに、槻橋ほかによる復元模型を用いたワークショップは、グリーンワークの一環として始められたものであるが、収集された情報を場所の記憶の再生や地域の復興に結び付ける活用方法が模索されて

表1 震災後の祭礼の状況

神社	主な祭礼行事	組織	モノ	場所	震災後の状況
上山八幡宮	稚児行列	△ 氏子会休止状態	○ 稚児衣装	× ルートの喪失	△ 稚児祈祷のみ
保呂羽神社	渡御	○ 被害なし	○ 神輿など	△ ルート喪失	△ ルートを変更し催行
荒嶋神社	七福神舞	× 旧契約講解散	× 震災前から	× 鳥居の流失 参道の損壊	× 休止
西宮神社	ご神体行事	△ 恵比寿講震災で半減	○ ご神体流失、本社が復元に付与	—	○ 仮設住宅で継続
古峯神社	本社代参	△ 古峯講休止状態	—	—	× 代参休止

いる¹³⁾。このような諸研究・諸実践に対して、本研究は記憶地図という手法を用いた復興支援のあり方を模索するものであり、最終的には、地域で育み継承されてきた文化遺産が、減災や復興に果たす役割を抽出し、地域防災的な観点からの評価を行いたいと考えている。

2. 調査の概要と地域概観

(1) 調査の概要

宮城県南三陸町志津川地区において、東日本大震災後の祭礼の実施状況、2016年度に祭礼を復活させた「南三陸五社之氏子青年会」（以下、「氏子青年会」）の成立の背景と活動状況を把握することを目的に、聞き取り調査を実施した。調査対象は、上山八幡宮関係者および、2016年度に新たに組織された「氏子青年会」の会員である。調査期間は、2017（平成29）年2月12日～15日である。

(2) 地域概観

荒嶋神社の氏子が多く住んでいた本浜町（図2）は、その名の通り明治までは海岸線に相当する浜であった。その浜の海側には沼地を挟んで、「沖ノ須賀」と呼ばれる砂州が横たわっていた⁴⁾。このあたりは1940～41（昭和15～16）年頃や、1960（昭和35）年のチリ地震で甚大な被害を受けた後の復興事業などで徐々に埋め立てられ、現在の本浜町が形成された。また、1937（昭和12）年、志津川湾の整備および津波防止、ノリ・カキ養殖の促進などを目的に、荒島と陸側の間に防波堤が建設され、荒島は沿岸と陸続きになった¹⁴⁾。平成に入ると本浜町から荒島に至る海岸沿いが海水浴場などとして整備された。

3. 震災前の荒嶋神社の祭礼

(1) 荒嶋神社の由緒

近世には南三陸町志津川地区に漁民の信仰が篤かった弁天宮があった。その神殿は廃絶したものの、荒島南方の岩礁・弁天島に弁財天を祀る小祠が残されていた¹⁵⁾。また、漁民が多く住む本浜町には金刀比羅大権現や八大龍神、塩竈神社、山神社、山神、素戔男大神の石碑があった。志津川地区では、1960（昭和35）年のチリ地震津波後、復興都市計画によって港湾とその周辺地区が整備された。この時、本浜町にあった石碑群が移転を余儀なくされた。そのため、石碑群は弁天島の弁天宮に合祀されるかたちで、新たに荒嶋神社が創建されるに至った。1961（昭和36）年、本殿が荒島の頂部に新築され、鎮座祭も執り行われた。荒嶋神社の祭礼には、荒嶋神社に祀られている神々がもともといた場所に里帰りする意味もこめられていた。

(2) 祭礼の概要

荒嶋神社の例祭日は7月25日である。宵宮の7月24日には、荒島から別当である本浜町の久保田家にご神体を移して一晩落ち着け、例祭日の7月25日には、舞を披露しながら同町をまわっていた。これが七福神舞と呼ばれるものである。七福神舞は、ご神体の1つの弁財天が起源と考えられる。当初大人によって舞われていた七福神舞は、2000（平成12）年頃から子供たちが七福神に扮し舞うようになった。子供たちは、まず鐘を鳴らす役をやり、次に太鼓をたたき、最後に七福神になるという順序で役割が与えられたという。時には市場の建屋に舞台が設置され、宵宮に神楽が行われ、祭礼行事が盛り上げられた。しかし、地区の少子化で担い手が減少したことから、七福神舞は、震災前年の2010（平成22）年に一時休止した。

休止に際して、年寄だけでの七福神舞による復活が検討されていたが、2011（平成23）年3月の津波により、荒嶋神社の本殿は被災を免れたものの鳥居や参道が損壊し、加えて、氏子が多く住む本浜町などが大きな被害を受けたため、七福神舞の復活は断念された。

(3) 組織

荒嶋神社の祭礼は、本浜町などに居住する久保田家一族からなる漁師の講（旧契約講）に支えられていた。荒嶋神社が創建された1960（昭和35）年頃から、久保田家が世襲で別当を続けている。かつて講員は約30人いたが、東日本大震災前には15人に減少し、震災前から祭礼を支える組織の世代交代が課題であった。

津波によって旧契約講の構成員のすべてが被災し、旧契約講は、共有財産を分け休止した。七福神舞は担

い手不足のため震災前に執り行われなくなっていたが、被災による旧契約講の休止に際して、七福神舞用に積み立てられていた資金は、その使途と共に地区の若者に託されることになった。

また、荒嶋神社には、漁師からなる旧契約講に加えて、多様な職種の人々からなる新契約講があった。新契約講の人々も旧契約講を手伝い、祭礼が執り行われてきた。しかし、勤め人などからなる新契約講の人々は祭礼の準備を優先できず、新契約講は2000（平成12）年頃に解散している。

(4) モノ

祭礼に必要なものは、七福神の装束や持ち物、太鼓、笛である。荒嶋神社の祭礼における七福神の役割と装束および持ち物を表2に示す。これらの多くは漁協に保管されていたが、津波で多くを失うことになった。装束は、2000（平成12）年頃に子供用に改められており、震災時には大人用のものはなかった。また、震災前には、カセットテープに入っていた笛（太鼓はない）の音源がCD化されていたという。

また七福神が移動するための手段も祭礼に必要なものであった。かつては、着飾った七福神が荒島から漁港に船で渡り、馬車やトラックの荷台に舞台をつくって、その上で太鼓や笛と共に舞を披露しながら、町中を練り歩いた。馬車の時代は、花笠を身に着けた子供たちが馬車を牽いて町内を練り歩き、道行く人から花をもらった。

表2 七福神の役割と装束、持ち物

七福神	役割	装束	持ち物
恵比寿	漁民の神様。大漁豊作、商売繁盛。	狩衣、烏帽子	釣り竿、鯛
大黒天	右手に持った打ち出の小槌を振ることで人々に富をもたらす。五穀豊穰、福德開運。	狩衣、頭巾	小槌、袋
毘沙門天	戦いをつかさどる神。	狩衣、甲冑	矛
弁財天	音楽の神、芸術の神。雄弁と知恵を受け、芸術と学問の分野での成功をもたらす。	着物、羽衣	琵琶、鈴
福祿寿	幸福をつかさどる神様。子孫繁栄、健康長寿。	狩衣、長い頭、白髪	杖、袋
寿老人	七福神の筆頭格。長寿の象徴。	白い狩衣、頭巾、白い髭	杖、桃
布袋	人格を円満に導く神様。	狩衣	杖、芭蕉扇

(5) 場所

祭礼に関わる重要な場所に漁協の建物（図2 下）があった。そこには、祭りに関係する道具の多くが保管されていた。また、地域の子どもたちが舞を練習したのも漁協であった。舞はかつて自身も舞った経験のある地域の若者が子供たちに教えた。祭礼が執り行われる直前、とくに夏休みに入ってから子供たちは漁協に集まって舞の練習をした。金曜日や土曜日が多かったそうである。練習後には、漁協近くのかき氷屋でかき氷を食べたという記憶をお持ちの方もいた。今回の津波で漁協の建物は被災し、保管されていた道具一式もほとんど流されてしまった。

また、七福神舞は移動を伴う動的なものでもあった。七福神舞が練り歩いたルートは年々変化したと思われるが、記憶地図（図2）を頼りにかつてのルートの1つを辿ってみると⁴⁾、荒嶋神社の別当の久保田家が所在する本浜町を起点に、かつての海岸線を西進して汐見橋で八幡川を渡り、その右岸を北上し、志津川駅前を往復したあと東進して八幡橋で再び八幡川を渡り、八幡川東部の旧市街地をぐるりと取り囲むように周って、ふたたび出発点に戻っている。途中、船主や漁師、漁具商など荒嶋神社の講員に多い漁業関係者にゆかりのある場所を通っており、ルートは講員の構成と密接に関わるものであったことが窺える。

4. 七福神舞復活の経緯

2016（平成28）年7月24日、荒嶋神社で七福神舞が復活した。地元の若者からなる「氏子青年会」が、2009（平成21）年以来7年ぶりに復活させたものである。本章では、この経緯を追う。

(1) 「氏子青年会」の発足

2016（平成28）年1月26日、上山八幡宮の禰宜の声かけで、祭礼の運営や復活に関心を持っていた地元の若者6名と上山八幡宮の宮司と禰宜を合わせ8名が上山八幡宮の社務所に集まった。集まったのは20～30代の

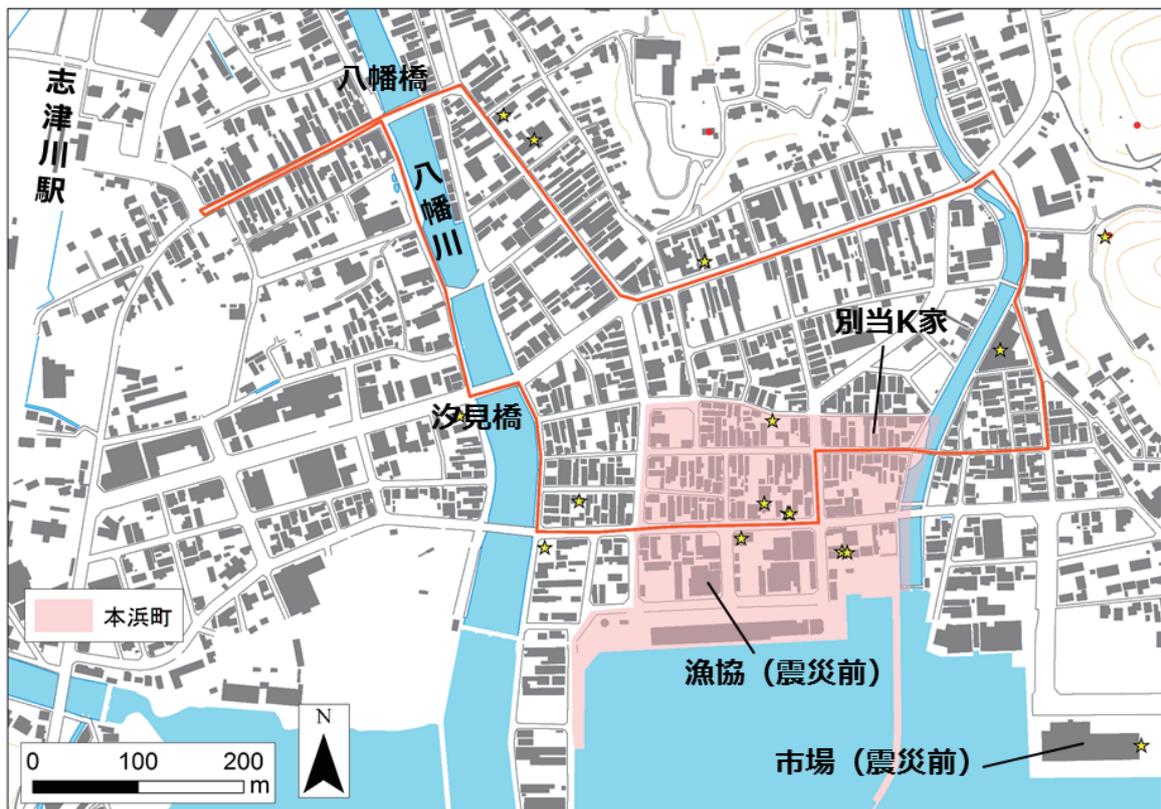
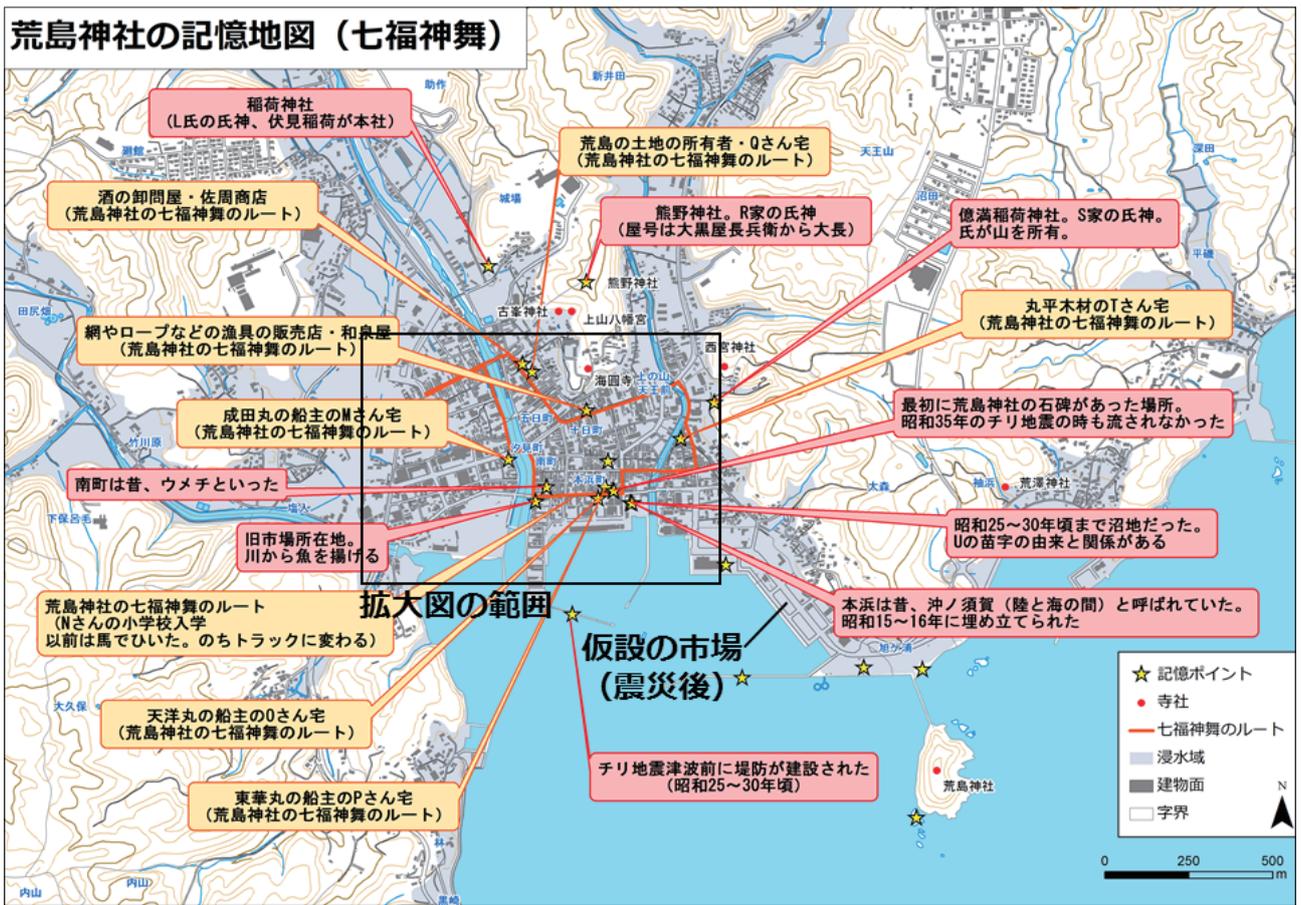


図2 荒嶋神社（七福神舞）の記憶地図（上）と関連地域の拡大図（下）

注）名前など個人が特定される情報はアルファベット1文字を充て表記している。上図の記憶地図は2014年度に作成したもの（出典は参考文献4）で、それに拡大図の範囲と「仮設の市場（震災後）」とを追記した。赤色の吹き出しは祭礼に関わる場所、黄色の吹き出しは祭礼に関わるルートの情報を表わしている。

ベースマップは2010年版のZmap-TOWN II（株ゼンリン）を用いた。

氏子たちであった。内訳は、五社に関わる宮司と禰宜の他、上山八幡宮1名、上山八幡宮と荒嶋神社を兼ねる者1名、荒嶋神社と西宮神社を兼ねる者3名、別地区の者1名であった。この集まりの名称を、南三陸五社之氏子青年会とし、一般には「氏子青年会」と呼称されることとなっていった。初回は、「町の祭りを神々とともに考える」をテーマに、それぞれがどの神社とつながりがあるのかについて自己紹介し、五社それぞれの例祭日などを話し合った。

この話し合いを通して、地元の若者たちは祭礼の復活に意欲を持っていたが、祭礼の全容を知らないことがわかった。震災前、一定の年齢に達した役員が中心となって祭礼を催行し、若者はこれを手伝う立場にあったため、全容を把握できていなかった。祭礼は、年長者から若者へ経験を介して伝える世代間継承によって守られてきたが、東日本大震災の甚大な被害は、この祭礼を継承するシステムを崩壊させていた。

また、祭礼は、それぞれの神社ごとの氏子会や契約講が支えるものであり、他の祭礼の運営については関わることもなく、何が行われているのか詳細を知る由もなかった。祭礼には、継承が危機に瀕した時にこれを補完する準備もなかった。

そこで参照されたのが記憶地図であった。記憶地図は、祭礼に渡御をともなう保呂羽神社、荒嶋神社、上山八幡宮のものがある。筆者らは2014（平成26）年度にこれを作成し、上山八幡宮に託していた。意欲はあっても経験のない若者たちを前にして、禰宜が取り出したのがこの記憶地図であった。若者たちは、記憶地図によって、それぞれの祭礼がどのようなものであったかを知ることができた。

(2) 当面の目標を定める

東日本大震災後、できる範囲で祭礼を継続している保呂羽神社と上山八幡宮に対して、荒嶋神社は支える組織を失い祭礼を休止していた。本浜町は大きく被災し、荒嶋神社の祭礼を司どっていた旧契約講は解散を余儀なくされた。旧契約講は解散の際、七福神舞用の資金の管理を地域の若者に託していた。「氏子青年会」のメンバーへの聞き取りによれば、資金を託されたことで、地域の若者には七福神舞の復活の希望も託されたような使命感が生まれた。

「氏子青年会」は、当面の目標を七福神舞の復活とした。七福神舞を当面の目標とできた理由として、まず、従来の組織である旧契約講が解散しその再開の目途がなく、かつ、「氏子青年会」の当初のメンバーに荒嶋神社に関係する若者が多かったことにより、新たな組織で運営することが容易だったことがあげられる。

とはいえ、組織の大幅な変更は、祭礼催行に必要な知識や経験を継承することを困難にする。しかし、七福神舞の場合、それを記憶地図で補うことができた。そして、彼らには子供の頃の祭礼の記憶があり七福神舞を舞った経験を持つ者もいた。それに加え、活動資金を得ていたことも大きな理由であった。

(3) 七福神舞復活の準備

2016（平成28）年5月のミーティングで、七福神舞の装束や小道具などの残存状況などが確認された。表2で示した七福神の装束や持ち物に必要な物品の内、神々の狩衣は神社への支援物資を転用することとなった。烏帽子や鈴は被災を免れた上山八幡宮の社務所に保管されていた。矛は購入、その他の釣り竿、鯛、小槌、袋、甲冑、羽衣、琵琶、かつら、杖、芭蕉扇は製作することとした。6月に買い出しが行われ、7月にかけて装束や持ち物などが製作された。保管されていた音源の視聴、配役も決定した。着付けは宮司が教示し、衣装をあわせ、舞の練習も行われた。太鼓や笛も津波で流失したが、震災前にCD化された音源の1つを高台に住んでいる氏子が所持して被災を免れ、それが今回笛の音源として利用された。笛の音源がなかったら七福神舞の復活はより困難だったかもしれないと「氏子青年会」メンバーの1人は語る。また、流失した太鼓の復元は今回はできなかったが、次回でさせたいとのことである。

舞は自身が子供の時に経験していた記憶が頼りだった。七福神舞が復興できた要因について、メンバーの半数が子供の頃に七福神舞を体験した記憶があったことが指摘されている¹⁶⁾。七福神舞は、2000（平成12）年頃から2009（平成21）年まで、子供たちが舞っていた。聞き取りによれば、当時本浜町の子供たち



図3 七福神舞を奉納した荒嶋神社本殿
注) 参考文献16より転載。

は、小さい頃から練習して、中学生くらいにはそれぞれの神になるように育ったという。衣装があり、舞があり、舞台があり、盛り上がる要素が多く、若者が参加しやすく、その体験が、七福神舞復興の基盤にあった。

(4) 七福神舞復活の日

南三陸町では、祭礼の際、鳥居にお幡があげられる。今回の宵宮でも「氏子青年会」によって流失を免れた荒嶋神社の鳥居の根元にお幡があげられた。2016（平成28）年7月24日、震災後上山八幡宮に避難していた荒嶋神社の祭神が荒島山頂の本殿に戻され、「氏子青年会」のメンバーが荒嶋山頂の本殿まで登り、七福神舞を奉納した（図3）。七福神舞は2回披露され、1回目は御神体に向けて、2回目は集まった参列者に向けて披露された。長く荒嶋神社を守ってきた別当の久保田氏は「震災があり、復活には時間がかかると思っていた。若い力のおかげでまた舞を見ることができてうれしい」と河北新報の取材に答えている¹⁷⁾。参列者は、神社関係者、七福神とその手伝い関係者、ビジターセンター関係者（2名）、新聞記者、それ以外（2名）の合計20名弱で、復活の日に立ち会えた氏子は決して多くはなかった。

(5) 七福神舞の復活が地域にもたらした影響

これ以降、8月から9月にかけて、夏祭りや他の神社の祭礼など複数のイベントで舞が披露された。とくに、8月27日に仮設の市場（図2）で行われた「第6回三陸海の盆 in 南三陸」では、解散した本浜町のお年寄りを含む多くの方々の前で舞を披露することができた。

南三陸町では、防災集団移転促進団地や災害公営住宅など新たな高台住宅地の整備事業が完了し、遠方の仮設住宅での生活を余儀なくされていた人々が南三陸町へ戻ることが可能になった。また、氏子のほとんどが従事している漁業も復興にあたって相互扶助のグループが組織されていたが、これも一定の復興が達成されたとのことで解散し、従来の落ち着いた生活が戻りつつある。

聞き取りによれば、落ち着いた生活ができるようになって、お祭りが無いのは寂しいという意見があがっていたそうである。とくに高齢者にとって、昔から地域で催行されていた祭礼は、地域のつながりを回復する上で重要なものと意識されていることがわかる。

5. 記憶地図の果たす役割

祭礼の催行は、若年時に手伝いなどを通して経験を積み、一定の年齢に達し役割を得て祭礼の全体を取り仕切る、地域コミュニティにおける世代間の継承の仕組みに基づいて支えられてきた。しかし、東日本大震災は、地域コミュニティにも激甚な被害をもたらし、従来の世代間の継承を困難にした。また、東日本大震災により神社の氏子によって継承されてきた祭礼が、氏子のみでは立ち行かなくなる事態が生じた。これに対して「氏子青年会」のような地域・神社をまたぐ横断的な若者による組織が活動を始めた。しかし、彼ら／彼女らの生業は様々で、とくに農業と漁業では繁忙期が異なり、関わりのない神社の祭礼については経験も知識もない。

筆者らは2014年度調査において、地域で営まれてきた祭礼の実態やその変遷、祭礼の中で意味づけされた場所といった、これまであまり可視化されることのなかった知識の理解を助けるために記憶地図を作成した。「氏子青年会」が地域の祭礼に関わりを持つとした時、各神社の実態を把握するための資料の1つとして記憶地図が活用された。このように、祭礼の記録としての意味がある記憶地図には、地域再生の志を持つ次世代の人材が、本来先人から得るはずであった経験を、受け継ぎ続けるツールとしての役割を果たしたと考えられる。

被災地では、復興事業が進み、落ち着いた生活を取り戻しつつある。その段階で求められるのが、地域のつながり、アイデンティティの再生であり、アイデンティティの源泉たる地域の文化遺産の復興の重要性が高まっている。筆者らは、2014（平成26）年度に祭礼のアーカイブ化に取り組み記憶地図を作成した。本年度はこの記憶地図が具体的に祭礼の復興に資するののかについて研究を進め、とくに祭礼の運営において経験継承のツールとしての役割が確認された。

現在、記憶地図は五社を束ねる上山八幡宮に保管し、「氏子青年会」など地域に公開している。今後、高台住宅地に人々が戻り、かつては町があった低地に商業地や公園などの整備が進み、震災を経た南三陸町の

人々の新たな生活が現出する。その時、無形の文化遺産が継承してきた地域を価値づける場所の再生が急務となろう。場所の再生は、他にはない場所、つまり地域のアイデンティティの再生であり、コミュニティの再生につながる動きである。この動きが加速する中、記憶地図は有用な情報を蓄積するツールとなる可能性がある。記憶地図はいかなる情報をいかに具備すべきなのか。現在の記憶地図を検証し、無形の文化遺産の再生、場所の再生、ひいては地域のコミュニティの再生に資するツールとして、記憶地図の作成手法を確立することが今後の課題である。

謝辞：本研究を進めるにあたり、南三陸町上山八幡宮禰宜工藤真弓様、「氏子青年会」の皆様には貴重なご意見を賜りました。また、本研究は科学研究費・基盤研究C「地域の文化遺産が被災後の復興に果たす役割に関する研究」（研究代表者：板谷直子）、立命館大学歴史都市防災研究所研究施設運営支援（拠点形成）の助成を受けたものです。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 南三陸町：東日本大震災からの復興—南三陸町の進捗状況—，2017.
- 2) 研究代表者 板谷直子（牛谷直子）：基盤研究C「地域の文化遺産が被災後の復興に果たす役割に関する研究」，2013-2016.
- 3) 板谷直子（牛谷直子）・Rohit JIGYASU・中谷友樹：宮城県南三陸町の被災した文化遺産の現状と復興の課題，歴史都市防災論文集，Vol. 8，pp.55-62，2014.
- 4) 板谷直子（牛谷直子）・中谷友樹・前田一馬・谷端 郷・平岡善浩：「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—，歴史都市防災論文集，Vol. 9，pp.73-80，2015.
- 5) 金 度源・石田優子・崔 明姫・米島万有子・板谷直子（牛谷直子）・大窪健之：東日本大震災に学ぶ歴史都市防災まちづくりに向けて—第3回国連防災会議 パブリックフォーラム「歴史都市防災シンポジウム仙台」—，歴史都市防災論文集，Vol. 9，pp.279-286，2015.
- 6) ヒロシマアーカイブ制作委員会：ヒロシマ・アーカイブ，2015，http://hiroshima.mapping.jp/index_jp.html 閲覧日2017年5月22日.
- 7) 赤石直美・福島幸宏・矢野桂司：WebGISを用いた戦後京都の記憶のアーカイブとその課題，地理情報システム学会講演論文集，Vol.24，CD-ROM，2015.
- 8) 矢野桂司・佐藤弘隆・河角直美：市民参加型GISによる祭礼景観の復元—昭和30年以前の京都祇園祭の山鉾行事における松原通一，若林芳樹・今井 修・瀬戸寿一・西村雄一郎編著：参加型GISの理論と応用—みんなで作り・使う地理空間情報—，古今書院，pp.118-124，2017.
- 9) ハーバード大学ライシャワー日本研究所：Japan Disasters Digital Archive，<http://jdarchive.org/ja> 閲覧日2017年5月22日.
- 10) 東北学院大学編：更地の向こう側—解散する集落「宿」の記憶地図—，かもがわ出版，2013.
- 11) 槻橋 修・友渕貴之・秋田遼介：浪江町請戸地区における場所の記憶の保存と活用に関する試論—被災地域におけるグリーンワークとしての1/500 復元模型を用いた着彩-対話型ワークショップの提案—，神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要，Vol.5，pp.13-24，2013.
- 12) 槻橋 修・平尾盛史：被災地における喪失した街空間の記述に関する試論—岩手県大槌町町方地区・復元模型ワークショップを通して得られた証言を基に—，都市計画報告集Vol.12，pp.86-93，2013.
- 13) 槻橋 修・山田恭平・中村秋香・平尾盛史：被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究—岩手県大槌町町方地区における復元模型ワークショップ—，日本建築学会計画系論文集，Vol.79，pp.1129-1137，2014.
- 14) 南三陸町：旧志津川町の年表，<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/10,842,57,html>，2012. 閲覧日2017年4月17日
- 15) 宮城県神社庁：南三陸町の神社，<http://miyagi-jinjacho.or.jp/> 閲覧日2017年4月11日
- 16) 工藤真弓：南三陸五社之氏子青年会レポート，<https://www.facebook.com/mayumi.kudo.>，2016. 閲覧日2017年4月12日
- 17) 河北新報：〈七福神舞〉被災地に7年ぶり復活，http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201607/20160725_15025.html，2016. 閲覧日2017年4月11日